



# 連 研 ノ ー ト E 編

れんけん  
〔連研ノートE編〕

- ◆問い1 わたし しあわ 私にとって幸せとはなんですか。…………… 連研ノートE編 1 (93)
- ◆問い2 そうぎ ほうじ なん 葬儀や法事は何のためにするのですか。…………… // 3 (95)
- ◆問い3 お な 老いて亡くなることがわかっていても、  
う い 受け入れられません。…………… // 5 (97)
- ◆問い4 た にん おも 他人からどう思われているのか、  
き し 気になって仕方ありません。…………… // 6 (98)
- ◆問い5 じょうど なん お浄土とは何ですか。…………… // 8 (100)
- ◆問い6 わたし かみ ほとけ しん 私は、神さまも仏さまも信じていますが、  
それではいけないのですか。…………… // 9 (101)
- ◆問い7 じぶん しあわ 自分だけが幸せでよいのでしょうか。…………… // 11 (103)
- ◆問い8 わたし さ べつ 私は差別をしたことはありません。  
ぶらく さ べつ なぜ部落差別はなくなるのでしょうか。  
わたし なに 私は何をすればよいのでしょうか。…………… // 13 (105)
- ◆問い9 かんきょう そうきいしよく かくさ しゃかいもんだい 環境・臓器移植・格差などの社会問題は、  
しゅうきょう はい こ もんだい おも 宗教が入り込む問題ではないと思いますが。…………… // 16 (108)
- ◆問い10 せんそう へいわ きず 戦争をなくし、平和を築きあげるには  
どうしたらよいですか。…………… // 17 (109)
- ◆問い11 れんけん とお かん き この連研を通して、感じたこと気づいたこと、  
うれしかったことを話し合ってください。…………… // 20 (112)
- ◆問い12 じ た こころゆた い 「自他ともに心豊かに生きる」とは  
どのようなことでしょうか。…………… // 22 (114)

## 連研ノートE問い1「私にとって幸せとはなんですか。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 最近、うれしかったこと、悲しかったことは何ですか。
2. あなたはどんなとき幸せだと感じますか。
3. あなたの幸せの基準をいくつかお聞かせください。

### ◆問いの背景

今回が一番最初の法座となります。皆さん、様々なご縁・導きでこの連研に参加されたことでしょう。1回目の今回は、気軽に少しでも緊張をとり、自己紹介をかねて、最近の喜怒哀楽のご自身の体験を通して、話し合いをはじめてみてはいかがでしょうか。そして、幸せを感じる時や幸せの基準について、ご自身のお考えを語って頂き、お互いに聴きあって頂ければと思います。

私たちは幸せを求めて日々生きているといってもよいでしょう。またそれぞれ、幸せの基準が違ってもいえます。

この法座では、お一人お一人に、これまで生きてこられた人生を振り返って頂きながら、幸せについて考えてみましょう。

### ◆味わっていたきたい言葉

蓮如上人、仰せられ候ふ。物をいへいと仰せられ候ふ。物を申さぬ者はおそろしきと仰せられ候ふ。信不信ともに、ただ物をいへいと仰せられ候ふ。物を申せば心底もきこえ、また人にも直さるるなり。ただ物を申せと、仰せられ候ふ

（『蓮如上人御一代記聞書』本（86）註釈版聖典1259頁）

蓮如上人は、「仏法について語りあう場では、すすんでものをいいなさい。黙りこんで一言も言わないものは何を考えているかわからず恐ろしい。信心を得たものも得ていないものも、ともかくものをいいなさい。そうすれば、心の奥で思っていることもよくわかるし、また、間違つて受けとめたことも人に直してもらえ。だから、すすんでものをいいなさい」と仰せになりました。

（『蓮如上人御一代記聞書』本（86）現代語版61頁）

前前住上人（蓮如）御法談以後、四五人の御兄弟へ仰せられ候ふ。四五人の衆寄合ひ談合せよ。かならず五人は五人ながら意巧にきくものなるあひだ、よくよく談合すべきのよし仰せられ候ふ。

（『蓮如上人御一代記聞書』末（119）註釈版聖典1270頁）

ご法話をされた後で蓮如上人は、四、五人のご子息たちに、「法話を聞いた後で、四、五人ずつが集まって、話しあいをしなさい。五人いれば五人とも、決して自分に都合のよいように聞くものであるから、聞き誤りのないよう十分に話しあわなければならない」と仰せになりました。

（『蓮如上人御一代記聞書』末（119）現代語版81頁）

そだ あ にんげんかんけい ひと こころ ふかく き みずか こころ そだ  
 育ち合う人間関係をつくるには、人の心を深く聞けるよう、自らの心を育てていくことが  
 だいじ き よ か はな はな じゆどうき  
 大事。「聞く」ことは、読んだり、書いたり、話したりすることにくらべて、受動的だ、という  
 ごかい ただ みみ き  
 誤解を正さなければなりません。耳に「聞こえている」から「聞けている」ということではあ  
 りません。「聞ける」ためには「傾聴」が必要です。傾聴とは①感じとる②注意をむける③共  
 かん きおく こころ せつきよくてき せいしんかつどう  
 感する④記憶するという心のはたらきをともなった積極的な精神活動です。

さいこうぎしやう  
 (西光義敏氏)

かね お金をもうける。うまいものを食べる。ひと から た 立てられる。ぜいたく あそ 遊ぶ。いい 服を着て、  
 いえ す 人生はそれにつきます。死がなければ・・・。

でんどうけいじばん  
 (伝道揭示板)

にんげん らく もと くる どうぶつ  
 人間とは楽を求めて、苦しむ動物である。

(伝道揭示板)

あ っ て だ っ た り 前 あ っ て だ っ た り 前 あ っ て だ っ た り 前  
 あって当たり前 出来て当たり前。当たり前が崩れると、当たり前じゃなくなる。

(伝道揭示板)

た べ な け れ ば し 死 ぬ、きんぎゆう かだい た べ て い て も し 死 ぬ、えいえん かだい  
 食べなければ死ぬ、緊急の課題。食べていても死ぬ、永遠の課題。

(伝道揭示板)

た て の いと 糸はあなた、よこの糸はわたし。あうべき糸にであえることを人は仕合わせと呼びます  
 (『糸』中島みゆき ※経(修多羅：たて糸))

## 連研ノートE問い2 「葬儀や法事は何のためにするのですか。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. お仏壇は先祖のいるところではないのですか。
2. 周りに迷惑をかけたくないので、私が死んだら「家族葬」でよいと思っ  
ているのですが。
3. 葬儀や法事をしないと罰が当たるのですか。

### ◆問いの背景

今回のテーマは、皆さんが一番身近と感じられる葬儀や法事についてです。昨今急激な社会変化に伴い、葬儀や法事のあり方が多様になってきています。葬儀でいいますと、昔は自宅や地域の会館で、隣近所の方々の協力を得ながら行われてきました。しかし最近、ほとんどが葬儀会館で葬儀社主導で、行き届いたサービスによって行われています。その背景としては、近所づきあいの大変さから解放され、冷暖房完備の快適な空間で、便利に行うことができるようになったからでしょうか？また、家族葬や通夜や葬儀を行わず火葬場直前の直葬も増加傾向にあります。

この法座では、人間しか行わない営みであるとされる葬儀や法事に関して、何のためにするのかの原点に立ち返り、お仏壇や葬儀・法事を切り口に僧俗ともにお互いに学びを深めたものです。

ご自身の体験をもとに、昔と今の葬儀や法事、仏事全般に関して、得られたものと無くしたものの、また、疑問点やわからないこと、色々な思いも話し合ってもらえればと思います。

### ◆味わっていただきたい言葉

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次にに仏に成りてたすけ候ふべきなり。わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念仏を回向して父母をもたすけ候はめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなりと

（『歎異抄』第五条 註釈版聖典834頁）

親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません。というのは、命のあるものはすべてみな、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人をもみな救わなければならないのです。念仏が自分の力で務める善でありますなら、その功德によって亡き父母を救いもしましょうが、念仏はそのようなものではありません。自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざま生を受け、どのような苦しみの中であろうとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、何よりもまず縁のある人々を救うことができるのです。

（『歎異抄』第五条 現代語版10頁）

前さきに生うれんものは後のちを導みちびき、後のちに生うれんひとは前さきを訪とぶらへ、連れんぞく無む窮くうにして、願ねがはくは休く止しせざらしめんと欲ほつす。無む辺へんの生しょう死じ海かいを尽つくさんがためのゆゑなり  
 (『教行信証』化身土文類 註釈版聖典474頁)

なぜなら、前まえに生うまれるものは後あとのものを導みちびき、後あとに生うまれるものは前まえのもののあとを尋たずね、果はてしなくつらなとって途とぎ切きれることのないようにしたいからである。それは、数かず限かぎりない迷まよいの人ひと々が残ひとびとらず救すくわれるためである  
 (『教行信証』化身土文類 現代語版646頁)

安あん楽らく浄じょう土どにいたるひと 五ご濁じよく悪あく世せにかへりては  
 釈しゃ迦か牟む尼に仏ぶつのごとくにて 利り益やく衆じゆ生じやうはきはもなし  
 (『浄土和讃』註釈版聖典560頁)

亡なき人ひとのためのお経きやうと思おもひしが、私すくが救すくわれていくお経きやうであったとは…。  
 (伝道揭示板)

人ひとは三さんつのものを遺のこして先さき立たっていく。お骨こつと思おもい出でとお念ねん仏ぶつなんです。  
 (伝道揭示板)

人ひとはであいによって育そだてられ、別わかれによって深ふかめられていく  
 (伝道揭示板)

亡なき人ひとの身みを案あんずる人ひとは多おほいが、亡なき人ひとの思おもいに気きづく人ひとは少すくない。  
 (伝道揭示板)

## 連研ノートE問3「老いて亡くなることがわかっていても、受け入れられません。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 私は、自分が死ぬのではないかと不安に耐えられません。
2. 親の介護をしていると、色々な思いがわきます。
3. 看取る側として、どのような心をもてばよいでしょうか。
4. 家族や友人の死から立ち直れません。どうしたらよいのでしょうか。
5. ペットをなくした寂しさに耐えられません。

### ◆問いの背景

今回は老いと死がテーマです。わかっていても受け入れられないという現実が、サブテーマにある不安ということではないでしょうか。「問い1」で、幸せについて話し合ったときに、老いや死ということばは出なかったのではないのでしょうか。それらを「不幸」として避けようとしているのが、これまでの私なのかも知れません。

現実には老いと死を考えると、介護をする側もされる側も老いてゆく身で、それぞれどのように思っているのかを話し合ってみると、私たちの老いに対する受け止め方が見えてきます。そして、その先には死があるということを、どう受け入れていくのでしょうか。

老いや、病の体験から出てくる「死にたい…」ということばは、「今の自分は好きではない」という思いの表れということもあります。

私たちが、老・病・死の現実を通して感じている、さまざまな課題や不安について話し合ってみましょう。

### ◆味わっていただきたい言葉

人、世間愛欲のなかにありて、独り生まれ独り死し、独り去り独り来る。行に当りて苦樂の地に至り趣く。身みづからこれを当くるに、代るものあることなし。

（『仏説無量寿経』巻下 註釈版聖典56頁）

人は世間の情にとらわれて生活しているが、結局独りで生れて独りで死に、独りで来て独りで去るのである。すなわち、それぞれの行いによって苦しい世界や楽しい世界に生れていく。すべては自分自身がそれにあたるのであって、だれも代ってくれるものはない。

（『仏説無量寿経』巻下 浄土三部経 現代語版99頁）

目もみえず候ふ。なにごともみなわすれて候ふうへに、ひとにあきらかに申すべき身にもあらず候ふ。

（『親鸞聖人御消息』註釈版聖典757頁）

年老いて目も見えなくなってきました。何についても忘れがちになり、また人にははっきりと説き示すことができるような身でもありません。

（『親鸞聖人御消息』現代語版38頁）

死ぬことに焦点を合わせているのではなく、死を医療の敗北とは見ない。死を否定的に捉えることはしないで、人間としての尊厳を保ちながら、最期までその人らしく生きるのを援助する

（姫路マリア病院ホスピス科部長 田村 亮医師 2008年ビハーラ研修会）

## 連研ノートE問4「他人からどう思われているのか、気になって仕方ありません。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 地域や職場でみんながやっているようにしなければ疎外感を感じます。みんなに合わせた方がよいのでしょうか。
2. あるがままに生きている人を見るとうらやましく思います。しかし、そのように生きたら身勝手に見られて、関係が壊れるのが怖いのです。
3. 「自分らしく」生きたいと思っていますが、「自分らしさ」をどうやって見つけたらよいのですか。

### ◆問いの背景

前回、「問い3」では、老いと死を受け入れられないという課題を話し合ってみました。生・老・病・死は、仏教が人間の根本的に抱えている課題として正面から見据え、人生の中でそれを乗り越えていこうとするテーマです。

私たちは、自分以外のさまざまなことと無関係で生きているわけではありませんので、そこには人や物との思い通りにならない現実があることを感じるのではないのでしょうか。

サブテーマにある、「あるがままに生きている人」・「自分らしく」生きたいという表現を通して、どのような生き方や人間関係を私たちは理想としているのかも考えてみたい点です。

「あるがまま」や、「自分らしさ」を、どのように思っているのか、このテーマを通して、私の内面と向き合ってみることができるのではないのでしょうか。

あなたの今の気持ちを、ことばで表現してみても…

### ◆味わっていただきたい言葉

わたしには子がある。私には財があると思って愚かな人は悩む。しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

（『法句経（ダンマパダ）』第62偈 中村元訳「ブツダ 真理のことば 感興のことば」19頁）

人間窓々として衆務を営み、年命の日夜に去ることを覚えぬ。灯の風中にありて滅すること期しがたきがごとし。忙々たる六道に、定趣なし。

（『往生礼讃 日没讃』註釈版聖典 七祖篇669頁）

人間はいそがしく、さまざまな務めにかかわって、いのちの日夜に去ることを知らない。あたかも風のなかのともしびが、いつ消えるともわからないようなものである。あわただしく六道を経めぐって、落ちつくところがない。

（『往生礼讃 日没讃』浄土真宗聖典勤行集172頁）

としごろ念仏して往生ねがふしるしには、もとあしかりしわがこころをもおもひかへして、とも同朋にもねんごろにこころのおはしましあはばこそ、世をいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ。

（『親鸞聖人御消息』註釈版聖典742頁）



ながねん あいだねんがつ おうじょう ねが  
長年の間念仏して往生を願うすがたとは、かつての自らの悪い心をあらためて、同じ念仏  
なかま たが した おも も  
の仲間とも互いに親しむ思いを持つようになることです。これが迷いの世界を厭うすがたで  
あろうと思おいます。

(『親鸞聖人御消息』現代語版14頁)

人間にとって最も悲しむべきことは、<sup>まず</sup>貧しさや<sup>やまい</sup>病ではない。むしろ、そのことによって<sup>みす</sup>見捨てられ、だれからも自分は必要とされていないと感じることである。

(マザーテレサ)

人間はいかなる<sup>まず</sup>貧しさ<sup>くる</sup>苦しみにも<sup>た</sup>耐えられる。しかし、人間は<sup>むな</sup>虚しさには<sup>た</sup>堪えられない。  
<sup>もと</sup>おたに<sup>だい</sup>かく<sup>がく</sup>ちょう <sup>ひろ</sup>せ<sup>た</sup>かし <sup>か</sup>ぜ <sup>な</sup>むら<sup>か</sup>おる  
(元大谷大学学長 廣瀬果『こころも風邪をひくのです 中村薫 著』10頁)

## 連研ノートE問い5「お浄土とは何ですか。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 大切な人を亡くしてしまいました。どうしているのでしょうか。
2. 私は死後の世界は無いと思っています。
3. お浄土は私の今の生活とどのような関係があるのですか。

### ◆問いの背景

今回のテーマは、浄土です。浄土真宗という宗名ですが、「お浄土とは何ですか」と問われると、行ったことがないからわからない…という答えになってしまうことが多かったのがこのテーマです。

それほど場所としてのイメージが強いのだと思いますが、死んでから行くところという固定観念を離れて考えてみたいというのがお浄土と私の今の生活という問いです。

私の今の生活は、問い4で話し合ったように人間関係の中でさまざまな課題を抱えています。そのお互いは、ひとりひとりかけがえのない尊いのちであり、すべてのいのちを浄土に救いとるはたらきが阿弥陀さまです。阿弥陀さまが私たち衆生のありかたをご覧になったときに大切な人を亡くしたり、死んだらおしまいだというように悲しみや虚しさを抱えて生きる私たちを見捨てることできないという願いが浄土として完成されています。

浄土という表現と、一般的によく使われる天国や、あの世という表現とはどう違うのでしょうか？

死んでから行ってみないとわからないというイメージを離れて、どんな時に私たちは光の明るさや暖かさ、生きる力を感じているのか、今の私のよりどころとしているものは何かを話し合ってみてください。そしてお互いの尊さを認め合い、支えあって生きていくことに目覚めさせるはたらきを感じ取っていただければと思います。

### ◆味わっていただきたい言葉

わしのちちおや八十四才、往生しましたお浄土さまに。わしのははおや八十三才で往生しましたお浄土さまに。わしもいきますやがてのほどに、おやこ三人もろとも、しゅじょうさいど（衆生済度）のみ（身）とはなる。ごおんうれしやなむあみだぶつ

（浅原才市）

如来の作願をたづぬれば 苦悩の有情をすてずして  
回向を首としたまひて 大悲心をば成就せり

（『正像末和讃』 註釈版聖典 606 頁）

つつしんで真仏土を案ずれば、仏はすなはちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなはち、大悲の誓願に酬報するがゆゑに、真の報仏土といふなり。すでに願います、すなはち光明・寿命の願（第十二・十三願）これなり

（『教行信証』真仏土文類 註釈版聖典 337 頁）

つつしんで、真実の仏と浄土をうかがうと、仏は思いはかることのできない光明の如来であり、浄土はまた限りない光明の世界である。すなわち、それは法蔵菩薩のおこされた大いなる慈悲の誓願の果報として成就されたものであるから、真実の報仏・報土というのである。その誓願とは、すなわち光明無量の願（第十二願）と寿命無量の願（第十三願）とである。

（『教行信証』真仏土文類 現代語版 383 頁）

## 連研ノートE問い6「私は、神さまも仏さまも信じていますが、それではいけないのですか。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 昔からのしきたりで、お寺も神社もみんなで護ってきたものだと思います。でも信教の自由だから、もうしなくてもよいのではありませんか。
2. お念仏をとえると何かよいことがありますか。
3. 運勢や占いなど、色々なものを頼りにしていますが、それで本当によいのでしょうか。
4. 靈感商法やカルト宗教にとられる人が多いのはなぜでしょうか。

### ◆問いの背景

問い5、「浄土」の次は神についてです。これは仏と神を対照させて優劣を考えるのではなく、日本の神道と仏教とは古くから鎮護国家や無病息災を祈念する宗教として、似かよった基盤の上に成り立っていました。そのため、諸神と諸仏を拝む目的に大きな違いを見出しにくくなっていました。それが、問い6の「神さまも仏さまも信じていますが、」という、いわゆる日本人の宗教意識の背景なのではないでしょうか。

例えば、2000年には、当時の森首相が「日本の国は、まさに天皇を中心にして神の国であるぞ、ということ国民の皆さんにしっかりと承知していただく…」と言ったり、2004年には、当時の小泉首相が、元日の靖国参拝を「初詣」とし「日本の伝統じゃないか」「どこの国でもその国の歴史や伝統、習慣を尊重することにとやかくは言わない」と言ったのは、日本は神の国でそれが歴史や伝統だという、昔からのしきたりとして当然のように表現されたものでした。

かつて、神道は宗教ではなく国民道徳であるとして神社参拝が強制された歴史があり、戦後70年を過ぎても靖国神社への政府要人の参拝が問題となる現実があります。

また、神楽や祭りという行事が伝統文化や町おこし、地域のお付き合いとして参加することが当然のようにとらえられる時には、個人の宗教的よりどころとは別の事という意識になっているのではないのでしょうか。あなたはどう思いますか？

私たちが行っている年中行事や、一生の通過儀礼を思い出しながら考えてみると、現世利益や運勢、占いなどのように、色々なものに祈ったり願ったりしている現実が見えてきます。そして、確かなよりどころを見出すことができずに、迷ったり恐れたりして何かに縛られている姿が見えてきませんか。

改めて身の回りの宗教や、私の宗教的よりどころ（生きる力や安心を与えるもの）について話し合ってみてください。

### ◆味わっていただきたい言葉

弟子とは釈迦・諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行によりてかならず大涅槃を超証すべきがゆゑに、眞の仏弟子といふ。

（『教行信証』信文類 註釈版聖典256頁）

弟子というのは釈尊や仏がたの弟子であり、他力金剛の信心を得た念仏の行者のことである。この他力回向の信と行によって、必ずこの上ないさとりを開くことができるから、眞の仏弟子という。

（『教行信証』信文類 現代語版243頁）

みづから<sup>ぶつ</sup>仏に<sup>きみょう</sup>帰命し、<sup>ほう</sup>法に<sup>きみょう</sup>帰命し、<sup>びくそう</sup>比丘僧に<sup>きみょう</sup>帰命せよ。余道に<sup>よどう</sup>事<sup>つか</sup>ふることを<sup>え</sup>得<sup>てん</sup>ざれ、天を  
 拝<sup>はい</sup>することを<sup>え</sup>得<sup>え</sup>ざれ、鬼神を<sup>きじん</sup>祠<sup>まつ</sup>ることを<sup>え</sup>得<sup>え</sup>ざれ、<sup>きちりょうにち</sup>吉良日を<sup>み</sup>視<sup>え</sup>ることを<sup>え</sup>得<sup>え</sup>ざれ  
 (『教行信証』化身土文類 註釈版聖典429頁)

すす<sup>ぶつ</sup>進んで<sup>ほう</sup>仏・<sup>そう</sup>法・<sup>さんぼう</sup>僧の<sup>きえ</sup>三宝に<sup>ぶつきょうい</sup>帰依するがよい。仏教<sup>い</sup>以外の<sup>おし</sup>教えに<sup>てん</sup>したがってはならない。天  
 の<sup>かみがみ</sup>神々を<sup>おが</sup>拝<sup>え</sup>んではならない。鬼神を<sup>きじん</sup>祭<sup>まつ</sup>ってはならない。日の<sup>ひ</sup>善<sup>よ</sup>し悪<sup>あ</sup>しを<sup>えら</sup>選<sup>えら</sup>んではならない  
 (『教行信証』化身土文類 現代語版562頁)

にほん<sup>ぶっしや</sup>日本の<sup>なか</sup>仏者の中、<sup>いっこうしゅう</sup>一向宗の<sup>もん</sup>門徒は、<sup>み</sup>弥<sup>だ</sup>陀<sup>いちぶつ</sup>一<sup>しん</sup>仏を<sup>しん</sup>信<sup>もつぱ</sup>ずること<sup>た</sup>専<sup>しんぶつ</sup>らにして、<sup>しん</sup>他の<sup>しん</sup>神<sup>ぶつ</sup>仏を<sup>しん</sup>信<sup>しん</sup>ぜず  
 いかなることありても<sup>きとう</sup>祈<sup>びよく</sup>禱<sup>じじゆつ</sup>などすることなく、<sup>びよく</sup>病<sup>じじゆつ</sup>苦<sup>ふすい</sup>ありても<sup>もち</sup>呪<sup>い</sup>術<sup>い</sup>・<sup>い</sup>符<sup>い</sup>水<sup>い</sup>を用<sup>い</sup>いず(中略)今、  
 じゆん<sup>いっこうしゅう</sup>純(春台)は<sup>いっこうしゅう</sup>一向宗に<sup>こうし</sup>あらざれども、<sup>しん</sup>孔子を<sup>しん</sup>信<sup>しん</sup>ずること、<sup>み</sup>かれらが<sup>だ</sup>弥<sup>しん</sup>陀<sup>しん</sup>を<sup>ごと</sup>信<sup>き</sup>ずるが<sup>ごと</sup>如<sup>き</sup>く、<sup>き</sup>鬼  
 じん<sup>とう</sup>神<sup>きとう</sup>に<sup>さいし</sup>遠<sup>さいし</sup>ざかりて<sup>まつた</sup>祈<sup>いっこうもん</sup>禱<sup>と</sup>・<sup>と</sup>祭<sup>と</sup>祀<sup>と</sup>せ<sup>と</sup>ざる<sup>と</sup>こと、<sup>と</sup>全<sup>と</sup>く<sup>と</sup>一<sup>と</sup>向<sup>と</sup>門<sup>と</sup>徒<sup>と</sup>の<sup>と</sup>ご<sup>と</sup>とし  
 (『聖学問答』太宰春台)

なも<sup>あ</sup>南<sup>あ</sup>無<sup>あ</sup>阿<sup>だ</sup>弥<sup>ぶつ</sup>陀<sup>ぶつ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>を<sup>ぶつ</sup>とな<sup>ぶつ</sup>ふれば<sup>ぶつ</sup> してん<sup>だ</sup>四<sup>だ</sup>天<sup>だ</sup>大<sup>だ</sup>王<sup>だ</sup>も<sup>ら</sup>ろ<sup>ら</sup>と<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>に  
 よる<sup>あ</sup>ひる<sup>あ</sup>つ<sup>あ</sup>ね<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>つ<sup>あ</sup>つ よろ<sup>あ</sup>づ<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>悪<sup>あ</sup>鬼<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>ち<sup>あ</sup>か<sup>あ</sup>づ<sup>あ</sup>け<sup>あ</sup>ず  
 (『現世利益和讃』註釈版聖典574頁)

## 連研ノートE問い7「自分だけが幸せでよいのでしょうか。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 私たちは一人では生きられません。幸せに生きることは私だけの問題ではないように思いますが、自分のことで精一杯です。
2. 大きな災害や事故が起こるたびに、私の身近でなくてよかったと思ってしまいます。
3. これだけ多くの人を自死に追い込む社会はおかしいと思います。何か私にできることはないのでしょうか。

### ◆問いの背景

あなたは、自己中心的な生き方をしていることが多いと感じたことはありませんか。自分一人の力で努力し、生きているように錯覚し、目に見えるものだけに執着し支えられていると考えてはいないでしょうか。見えない大きなはたらきにも支えられているのではないのでしょうか。

世の中の出来事全てを他人ごととしてしか受け入れられない人間の生き方を考えて、人の苦しみ例えば、人生、人間関係、老いることなどを考える生き方を知るべきではないのでしょうか。

自分一人が、生きるという面のことしか考えない有り方を、身近な人の死を通して人生を生老病死の全体を含んで考えてみてはどうでしょうか。自分の幸せは、はかなく、変わっていくものであるということに気づかされます。人生の苦しみは誰もがさけて通ることができません。その出来事を支え合って生かされているということが幸せなのではないのでしょうか。多くの社会問題に向き合うことが、私の生き方につながるのではないのでしょうか。

### ◆味わっていただきたい言葉

誠なるかな、摂取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ  
 （『教行信証』総序 註釈版聖典132頁）

如来の本願の何とまことであることか。摂め取ってお捨てにならないという眞実の仰せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。この本願のいわれを聞いて、疑いためらつてはならない。

（『教行信証』総序 現代語版5頁）

悲しきかな愚禿鷲、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、眞証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。  
 （『教行信証』信文類 註釈版聖典266頁）

愛欲の広い海に沈み、名利の深い山に迷って、正定聚に入っていることを喜ばず、眞実のさとりに近づくことを楽しいとも思わない。恥しく、嘆かわしいことである。

（『教行信証』信文類 現代語版260頁）

慶よろこばしいかな、西せい蕃ばん・月げ支しの聖しょう典てん、東とう夏か（中国）・日じ域いき（日本）の師し釈しゃくに、遇あひがたくしていま遇あふことを得えたり、聞ききがたくしてすでに聞きくことを得えたり。真しん宗しゅうの教きょう行ぎょう証しゅうを敬きやう信しんして、ことに如に来らの恩おん徳とくの深ふかきことを知しんぬ。ここをもつて聞きくところをよよろこび、獲うるところを嘆たんずるなりと。  
（『教行信証』総序 註釈版聖典132頁）

よよろこばしいことに、印いんド・西さい域いきの聖せい典てん、中ちゅう国こく・日にっ本ぽんの祖そ師しがた方かの解かい釈しゃくに、遇あひがたいのに今いま遇あうことができ、聞ききがたいのにすでに聞きくことができた。そしてこの真しん実じつの教きょう・行ぎょう・証しゅうの法ぼうを心こころから信しんじ、如に来らの恩おん徳とくの深ふかいことを明あきらかに知しった。そこで、聞きかせていただいたところをよよろこび、得えさせていただいたところをたたえるのである。  
（『教行信証』総序 現代語版5頁）

親しん鸞らんは父ふ母もの孝きやう養ようのためとて、一いっ返ぱんにても念ねん仏ぶつ申もうしたること、いまだ候そうらはず。そのゆゑは、一いっ切せつの有う情じょうはみなもつて世せ々せ生しやう々じやうの父ふ母も・兄ぎ弟たいなり。いづれもいづれも、この順しん次じつ生きやうに仏ぶつに成なりてたすけ候そうらふべきなり。わがちからにてはげむ善ぜんにても候そうらはばこそ、念ねん仏ぶつを回え向こうして父ふ母もをもたすけ候そうらはめ。ただ自じ力りきをすてて、いそぎ浄じやう土どのさとりをひらきなば、六ろく道どう四し生しやうのあひだ、いづれの業ご苦くにしづめりとも、神じん通つう方ほう便べんをもつて、まづ有う縁えんを度どすべきなりと。  
（『歎異抄』第五条 註釈版聖典834頁）

親しん鸞らんは亡なき父ちち母ははの追つい善ぜん供く養ようのために念ねん仏ぶつしたことは、かいつて一いち度どもありません。というのは、命いのちのあるものはすべてみな、これまで何なん度どとなく生うまれ変かり死しにかわりてきた中なかで、父ふ母ぼであり兄ぎやう弟たい・姉し妹まいであったのです。この世よの命いのちを終おえ、浄じやう土どに往おう生じやうしてただちほに仏ほとけとなり、どの人ひとをもみな救すくわなければならぬのです。念ねん仏ぶつが自じ分ぶんの力ちからで務つとめる善ぜんでありますなら、その功く徳とくによつて亡なき父ちち母ははを救すくいもしましうが、念ねん仏ぶつはそのようなものではありません。自じ力りきにとらわれた心こころを捨すて、速すみやかに浄じやう土どに往おう生じやうしてさとりを開ひらいたなら、迷まよいの世せ界かいにさまざまな生せいを受け、どのような苦くるしみの中なかにあろうとも、自じ由ゆう自じ在ざいで不ふ可か思し議ぎなはたらきにより、何なによりもまず縁えんのある人ひと々を救すくうことができるのです。  
（『歎異抄』第五条 現代語版10頁）

善ぜん人にんばかりの家か庭ていには争あらいごとが絶たえない

（伝道揭示板）

私わには都つごう合ごうの良よい人ぜんが善ぜん人にん、都つごう合ごうの悪わるい人あくは悪あく人にんときめてい

（伝道揭示板）

## 連研ノートE問い8「私は差別をしたことはありません。なぜ部落差別はなくなるのでしょうか。私は何をすればよいのでしょうか。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. お寺で差別問題の話をする必要はありません。もっとご信心のお話をさせていただきたいのですが。
2. この世の差別は、前世の因縁や煩惱によって起こるのでしょうか。
3. 国籍や民族などへの差別は、なぜ無くならないのでしょうか。
4. いじめをなくすために、私は何ができるのでしょうか。
5. いきいきと生きるために、性に関する自由な生き方を求める人が増えています。お互いの悩みや思いを語り合ってみましょう。
6. 障がい者やハンセン病に対する差別について考えてみましょう。

### ◆問いの背景

さて、釈尊の伝記によると、生まれてすぐ七歩あゆまれ「天上天下 唯我独尊 三界皆苦 吾当安之」『修行本起経』とのべられたと伝わっています。仏教は私たちの苦悩の解決を出発点としていることを説示しているのでしょうか。

私たちの信心のありようを振り返るとき一人ひとりの現実の苦悩や社会の問題と宗教（信心の問題）を別の事として使い分けていないのでしょうか。『浄土真宗の生活信条』は「み仏の誓いを信じ 尊い名をとなえつつ 強く明るく生き抜きます」に始まり、「み仏の恵みを喜び互いにうやまい助けあい 社会のために尽します」とあります。また、『浄土真宗の教章』や『宗制』には念仏者、教団の歩む道として「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」と明示されています。

様々な差別事象の裏に背景（原因）があり、その底に本質があるといわれます。わたし達のものの見方、考え方、感じ方や行動の仕方の底に、私たちの生き方の、価値観があります。その価値観を変革するのが信心であり、私の身・口・意の三業をお育て下さる阿弥陀様のはたらきではないのでしょうか。

前世の因縁によって差別したり差別されたりするという意見や、人間の煩惱は無くならないから差別は無くならない…、との意見があります。このような意見に捉われそうになったら、平等の救いによって開かれた眼を通して、あなたの周りを見つめてください。差別心を克服して生き抜き、活動されている人々がおられるのではないのでしょうか。不平等な社会に対して無関心、無抵抗であることは、私たちが平等に生きていくべき権利を阻害し、社会の発展を妨げることにもなるといわれます。私たち念仏者としての真のお育てはそこから始まるのです。ご聴聞させていただいたみ教えが私を導き、私の内面に主体化していくとき、自分が少しずつ変わり始めるのです。それが私の行動となって表れてくるはずで、「ようよう少しずつ変わる」と親鸞聖人は仰せられました。

## ◆味わっていただきたい言葉

一つの角度から見るとお念仏の教えが、ただ信心を得てお浄土に参るという心の中だけの問題になってしまっている。そのとき他の人々がどういう生き方をしているか、どういう苦しみを抱えているかということが見えなくなる、関心が及ばなくなる、という信心の味わい方そのものに眼を向けなければならない…。私たちのお念仏の受け取り方そのものにもう一度目を向けて掘り起こしていく必要がある。

(第4回全国布教使大会 即如ご門主ご法話)

もとは無明の酒に酔ひて、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ好みめしあうて侯ひつるに、仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて侯ふぞかし。

(『親鸞聖人御消息』 註釈版聖典 739頁)

以前は無明の酒に酔って、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒ばかりを好んでおられました。阿弥陀仏の本願を聞き始めてから、無明の酔いも次第に醒め、少しずつ三毒も好まないようになり、阿弥陀仏の薬を常に好むようになっておられるのです。

(『親鸞聖人御消息』 現代語版 9頁)

めでたき仏の御ちかひのあればとて、わざとすまじきことどもをもし、おもふまじきことどもをもおもひなどせんは、よくよくこの世のいとはしからず、身のわろきことをおもひしらぬにて侯へば、念仏にこころざしもなく、仏の御ちかひにもこころざしのおはしまさぬにて侯へば、念仏せさせたまふとも、その御こころざしにては順次の往生もかたくや侯ふべからん。

(『親鸞聖人御消息』 註釈版聖典 744頁)

尊い阿弥陀仏の本願があるからといって、わざとしてはならないことをし、思ってはならないことを思うような人は、まったくこの迷いの世界を厭うことがなく、この身の悪く知らないので、念仏しようという思いもなく、本願を信じる心もないのです。たとえ念仏をしておられても、そのようなお心では、この世の命を終えて浄土に往生することはきっと難しいことでしょう。

(『親鸞聖人御消息』 現代語版 17頁)

諸仏三業莊嚴して 畢竟平等なることは  
衆生虚誑の身口意を 治せんがためとのべたまふ

(『高僧和讃』 註釈版聖典 586頁)

他力の信心うるひとを うやまひおほきによろこべば  
すなはちわが親友ぞと 教主世尊はほめたまふ

(『正像末和讃』 註釈版聖典 610頁)



## ◆参考資料

差別とは、正当な理由もなく一方的に、等しく幸せに生きたいという願いと要求を踏みじり、ことさらのものごとの道理を歪め、不平等な取り扱いをして不利益を強い、人間の尊厳（誇り）を傷つけ、いやしめ、おとしめること。  
（川内俊彦）

人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認することは、世界における自由、正義及び平和の基礎である。  
（世界人権宣言 前文）

すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である  
（世界人権宣言 第1条）

すべて国民は、個人として尊重される。  
（日本国憲法 第13条）

すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。  
（日本国憲法 第14条）

すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。（日本国憲法 第25条）

### 同和对策審議会答申 第一部 同和問題の認識 1 同和問題の本質<抜粋>

いわゆる同和問題とは、日本社会の歴史的発展の過程において形成された身分階層構造に基づく差別により、日本国民の一部の集団が経済的・社会的・文化的に低位の状態におかれ、現代社会においても、なおいちじるしく基本的人権を侵害され、とくに、近代社会の原理として何人も保障されている市民的権利と自由を完全に保障されていないという、最も深刻にして重大な社会問題である。

<中略>

同和問題もまた、すべての社会事象がそうであるように、人間社会の歴史的発展の一定の段階において発生し、成長し、消滅する歴史的現象にほかならない。

したがって、いかなる時代がこようと、どのように社会が変化しようと、同和問題が解決することは永久にありえないと考えるのは妥当でない。また、「寝た子を起すな」式の考えで、同和問題はそのまま放置しておけば社会進化にともない、いつとはなく解消すると主張することにも同意できない。  
1965（昭和40）年8月11日

上記のように答申では、同和問題は、基本的人権が侵害されている重大な社会問題であり国民的課題であって、過去の問題ではなく現在も存在しているという認識を示したものです。

その後、この答申を受けて行政的にも社会全体としても国民的課題として同和問題に取り組んできました。また、教団においては、同朋運動として自らの差別体質を問い、差別・被差別からの解放に向け取り組んできました。

その結果、意識・教育・制度等の様々な分野において変革が行われ大きな成果がありました。が、未だにインターネットなどでの差別事象や、身元調査などによる結婚・就業にかかわる差別事件が惹起しています。国民的課題として「御同朋・御同行」として差別解消へ向け取り組んでいきましょう。

連研ノートE問9「環境・臓器移植・格差などの社会問題は、宗教が入り込む問題ではないと思いますが。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 脳死、臓器移植にどのように関わればよいのでしょうか。
2. 快適な生活を続けるためには、原発もやむを得ないという人がいます。どう考えたらよいのでしょうか。
3. 私たちが取り組める環境問題とはどんなことでしょうか。
4. 社会のさまざまな問題は、私一人の力では解決できないのでは。

### ◆問いの背景

現在、私たちが生きている社会は、イギリスの産業革命以来、科学を絶対視して進歩し、人類の英知を結集して成長してきました。また、先端医療の世界では、治らなかった患者が社会復帰して生活しているケースが増えてきました。それは、私たちに快適で豊かな生活を届けてくれました。しかし、一方でそのことが、限りあるいのちとして互いに共存している事実を見えなくして来ました。そのことは、地球の自然環境の破壊や、資源の枯渇が原因で、国々の領土紛争にまで発展し深刻な問題となっています。

普段の私は、自分の人生と関わりがない処の問題だと思って生きていますが、その問題に直面している人々にとっては、毎日のいのちの危機を感じながら生活をしています。未来に解決の希望すら見出せずに現状を受け入れている社会や私たちは、そのことに関心をもって学び合い、共に解決の方向へ進むことが、今の私たちにできることではないでしょうか。

多くの犠牲の結果として今の私たちの生活が成り立っていることに気づかされるとき、「罪業深重」という言葉をここで一緒に考えてみたいと思います。真実を求めて生き抜かれた宗祖に学び、自らの生き方を問う時、宗教の真価は個人の救済にとどまらず、苦悩する人々と共に生きることでできる社会の実現に向かわせることになるのではないのでしょうか。

### ◆味わっていただきたい言葉

釈迦牟尼仏、よく甚難稀有の事をなして、よく娑婆国土の五濁悪世、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁のなかにおいて、阿耨多羅三藐三菩提を得て、もろもろの衆生のために、この一切世間難信の法を説きたまふ  
（『仏説阿弥陀経』註釈版聖典128頁）

釈迦牟尼仏は、世にもまれな難しく尊い行を成しとげられた。娑婆世界はさまざまな濁りに満ちていて、汚れきった時代の中、思想は乱れ、煩惱は激しくさかんであり、人々は悪事を犯すばかりで、その寿命はしだいに短くなる。そのような中にありながら、この上ないさとりを開いて、人々のためにすべての世に超えすぐれた信じがたいほどの尊い教えをお説きになったことである  
（『仏説阿弥陀経』浄土三部経 現代語版229頁）

地球の歴史を考えます時、自然現象としての地震や豪雨は、数限りなくあったことでしょう。しかし、それが深刻な災害となるのは、人間のあり方、社会のあり方によります。特に、今回の原子力発電所の事故は、自然の調和を破り、後の世代に大きな犠牲と負担を強いることになりました。これは肥大した人間の欲望のもたらしたところでもあります。

（『親鸞聖人750回大遠忌法要御満座を機縁として「新たな始まり」を期する消息」  
本願寺第二十四代大谷光真門主）

## 連研ノートE問い10「戦争をなくし、平和を築きあげるにはどうしたらよいですか。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 宗門は、戦争を再び繰り返してはならないという決意を確認するため、「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」をお勤めしています。この願いをどう受け止めるべきでしょうか。
2. 国のために、愛するものを守るために戦死された方を、靖国神社に祀るのは当然だと思いますが。
3. 平和を維持するために引き起こされる、さまざまな苦しみや悲しみについてどう考えたらよいでしょうか。
4. 平和を壊す宗教もあるのではないですか。
5. 浄土真宗は戦争についてどのように考えているのですか。

### ◆問いの背景

日本では、戦後70年が過ぎた今日、先の戦争の鮮明な記憶をもたれる方々も少なくなりつつあります。二度と悲惨な戦争を経験することがないよう、私たちの先輩がたが経験し今なお続く戦争がもたらした原爆症等の諸問題を後世に伝えるために、そして、今なお社会を揺るがす領土問題や基地問題等を解消するために私たちができることは何でしょうか。

残念ながら世界では、今もなお各地で紛争やテロが起り続け、戦火の絶えることがありません。核兵器を保有する国や保有しようとする国も後を絶ちません。そして、この瞬間にも数多くの尊い命が失われ続けています。歴史上、世界各地で悲惨な戦争が繰り返されてきましたが、それを歴史の教訓とすることなく、争いは繰り返されているのです。なぜ国家間の紛争が絶えることがないのでしょうか。いったい戦争は誰がどういう思いで起こしているのでしょうか。また平和とはどういう状態のことを言うのでしょうか。この機会に、それぞれの思いを語り合ってみましょう。

### ◆味わっていただきたい言葉

仏の遊履したまふところの国邑・丘聚、化を蒙らざるはなし。天下和順し日月清明なり。風雨時をもつてし、災厲起らず、国豊かに民安くして、兵戈用ゐることなし。〔人民〕徳を崇め仁を興し、つとめて礼讓を修す

（『仏説無量寿経』巻下 註釈版聖典73頁）

仏が歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれないところはない。そのため世の中は平和に治まり、太陽も月も明るく輝き、風もほどよく吹き、雨もよい時に降り、災害や疫病などもおこらず、国は豊かになり、民衆は平穩に暮し、武器をとって争うこともなくなる。人々は徳を尊び、思いやりの心を持ち、あつく礼儀を重んじ、互いに譲りあうのである

（『仏説無量寿経』巻下 浄土三部経 現代語版135頁）

実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。

（『法句経（ダンマパダ）』第5偈）

他人<sup>たにん</sup>を苦しめる<sup>くる</sup>ことによって自分の<sup>じぶん</sup>快樂<sup>かいらく</sup>を求める<sup>もと</sup>人は、怨<sup>うら</sup>みの絆<sup>きずな</sup>にまつわれて、怨<sup>うら</sup>みから免<sup>まぬ</sup>れることができない。

〔法句經(ダンマパダ)〕第291偈

すべての者<sup>もの</sup>は暴力<sup>ぼうりょく</sup>におびえ、すべての者<sup>もの</sup>は死<sup>し</sup>をおそれる。己<sup>おの</sup>が身<sup>み</sup>をひきくらべて、殺<sup>ころ</sup>してはならぬ、殺<sup>ころ</sup>さしめてはならぬ。

〔法句經(ダンマパダ)〕第129偈

すべての者<sup>もの</sup>は暴力<sup>ぼうりょく</sup>におびえる。すべての(生きもの)にとつて生命<sup>いのち</sup>は愛<sup>いと</sup>しい。己<sup>おの</sup>が身<sup>み</sup>にひきくらべて、殺<sup>ころ</sup>してはならぬ。殺<sup>ころ</sup>さしめてはならぬ。

〔法句經(ダンマパダ)〕第130偈

世界<sup>せかい</sup>がぜんたい幸福<sup>しんぷく</sup>にならないうちは個人<sup>こじん</sup>の幸福<sup>しんぷく</sup>はあり得ない。

〔農民芸術概論綱要〕宮沢賢治

### ◆参考資料

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍<sup>さんか</sup>が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託<sup>しんたく</sup>によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制<sup>せんせい</sup>と隷従<sup>れいじゆう</sup>、圧迫<sup>あつぱく</sup>と偏狭<sup>へんきやう</sup>を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

(日本国憲法前文)

1. 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇<sup>いかく</sup>又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
2. 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

(日本国憲法第9条)

## 浄土真宗本願寺派 平和宣言

多数の民間人を含む、尊い命が犠牲となったアジア・太平洋戦争が終結して、今年で69年になります。悲惨な戦争は二度と起こすまいという願いを持って、ここ千鳥ヶ淵に参集した私たちは、戦争で犠牲となられた国内外のすべての方々に対して、心より追悼の意を表します。そして、ご遺族の方々の心に消えることのない悲しみを、あらためて私どもの心に深く刻みます。

世界では今もなお各地で紛争が起こり、戦火の絶えることがありません。そして、この瞬間にも数多くの尊い命が失われ続けています。歴史上、世界各地で悲惨な戦争がしばしば繰り返されてきましたが、それを歴史の教訓とすることなく、私たちは争いを繰り返してきているのです。この止むことのない世界の争いの根本的な原因は、理性では克服することのできない、人間の自己中心的な在り方、人間の根本的な愚かさにあることを、心の底から気づかねばなりません。

「煩惱成就のわれら」と親鸞聖人が述べられたように、どこまでも根深い煩惱と愚かさに見差しているのが人間という存在なのです。そういう私たちではありますが、阿弥陀如来の智慧の光に照らされて、その愚かさには気づかされるのです。そして、おのれの内なる愚かさには気づかされた私たちは、現実生きるこの世界において、常に過去の歴史に学び、愚かな過ちを再びおかすことのないよう、また自己本位で排他的なあり方に厳しい批判的な目を持ち、この地上世界に平和が実現するよう努めるべきであります。

縁起の真理に目覚められた釈尊は「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ、安楽であれ」と願っておられます。この世界に存在する生きとし生けるものは、私たち凡夫の計らいを超え、縁起によって互いに深く関わり合っているのです。釈尊から2500年隔てた私たちの願いもまた、私たち生きとし生けるものすべてが、戦争のない安穩な社会で、皆ともに幸せに生きていくことにあります。この普遍の理想を実現するために、互いに排他的な憎しみの心を克服し、尊い命を奪い合うという愚かな争いをこの地球上からなくすことこそ、私たちすべてが共有すべき目標であることを互いに確認いたしましょう。

過去から現在に至るまでの、あらゆる戦禍で犠牲になられた方々の心の無念さに、私たちはあらためて想いを寄せ、武器によっては世界の平和、人類の幸福はもたらされないことを再度、共に自覚し、恒久の平和を目指すことを、今、ここに、改めて誓いましょう。このことこそが、戦禍で亡くなられた方々を追悼することの意味でありましょう。

尊い命が失われた歴史を後世に語り継ぎ、それを教訓として、自他共に心豊かに生きることのできる真の平和をこの世界に実現するために、今年もまた、この日に、私たちは「世のなか安穩なれ」との願いをこめて、日本各地で平和の鐘を響かせます。「響流十方」と響きわたるよう、この願いを世界に拡げてまいりましょう。

2014(平成26)年9月18日「浄土真宗本願寺派」(千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要平和宣言)

## 連研ノートE問11「この連研を通して、感じたこと気づいたこと、うれしかったことを話し合ってください。」

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 連研を受けて、変わったこと、変わらなかったことは何ですか。
2. 連研を受けて、浄土真宗とはどのような教えだと思いますか。
3. あなたはこれからどんな人生を送りたいですか。そして何を大切にしていきたいですか。

### ◆問いの背景

今回は出会い（出遇い）と気づきがテーマです。これらは実は連研における12回の研修全てを貫くテーマであるといってもよいでしょう。話し合いを通して気づいたこと、共感出来たことを話してみましょう。連研に参加する前に感じていた仏教やお寺、浄土真宗の教えに対する印象に変化が生じたのではないのでしょうか。

お念仏の仲間や浄土真宗の教えに出会うことによって、見えてくる私自身の姿を掘り下げてみましょう。そこから私の歩むべき道が見いだせるのではないのでしょうか。

親鸞聖人がお念仏をよろこぶ人々を「とも同朋・御同行」と呼ばれた意味についても話し合ってみましょう。

### ◆味わっていたきたい言葉

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。

（『教行信証』証文類 註釈版聖典307頁）

さて、煩惱にまみれ、迷いの罪に汚れた衆生が、仏より回向された信と行とを得ると、たちどころに大乘の正定聚の位に入るのである。正定聚の位にあるから、浄土に生れて必ずさとりに至る。

（『教行信証』証文類 現代語版329頁）

苦しみ悩む人生も、如来の慈悲に出あうとき、もはや苦悩のままではない。阿弥陀如来に抱かれて人生を歩み、さとりの世界に導かれていくこととなる。

（『今ここでの救い』拝読浄土真宗のみ教え21頁）

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

（『歎異抄』第二条 註釈版聖典832頁）

この親鸞においては、「ただ念仏して、阿弥陀仏に救われ往生させていただくのである」という法然上人のお言葉をいただき、それを信じているだけで、他に何かがあるわけではありません。

（『歎異抄』第二条 現代語版6頁）

かの安楽国土はこれ阿弥陀如来正覚浄華の化生するところにあらざるることなし。同一に念仏して別の道なきがゆゑに。遠く通ずるに、それ四海のうちみな兄弟とするなり。眷属無量なり。

(『教行信証』証文類 註釈版聖典310頁)

浄土への往生は、みな阿弥陀仏の清らかなさとの花からの化生である。それは同じ念仏によって生れるのであり、その他の道によるのではないからである。そこで、遠くあらゆる世界に通じて、念仏するものはみな兄弟となるのであり、浄土の仲間は数限りない。

(『教行信証』証文類 現代語版335頁)

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次に念仏に成りてたすけ候ふべきなり。わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念仏を回向して父母をもたすけ候はめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなりと。

(『歎異抄』第五条 註釈版聖典834頁)

親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません。というのは、命のあるものはすべてみな、これまで何度となく生れ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人をもみな救わなければならないのです。念仏が自分の力で務める善でありますなら、その功德によって亡き父母を救いもしましようが、念仏はそのようなものではありません。自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざまな生を受け、どのような苦しみの中にあるとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、何よりもまず縁のある人々を救うことができるのです。

(『歎異抄』第五条 現代語版10頁)

## 連研ノートE 関い12「自他ともに心豊かに生きる」とはどのようなことでしょうか。

### ◆サブテーマ（私の問い）

1. 一緒にいて安心できる人は誰ですか。あなたはどんな時に安心できますか。
2. 「無縁社会」という言葉があります。「つながり」や「きずな」は無くなってしまわないのでしょうか。
3. あなたにとってお寺とはどんなところですか。

### ◆問いの背景

「自他ともに」ということは「私と私以外の他者」ということですが、普段私は、自分のことしか考えないで生きているように思います。また自分の立場でしか物事を考えたり行動したりできないのではないのでしょうか。もっと突き詰めて考えると「そのような自分のあり方にも気付けないで生きてきた」と仏法を聞かせて頂き気付かされた方がおられたと思います。他者によって生かされ続けてきた自分なのに、自分だけが心豊かに生きたいと願ってもかなわないことだということです。反対に自分以外の他者だけが心豊かに生きていたらどうでしょう。私は、毎日いかりと恨みの心で周囲を眺めるかも知れません。

無意識に私たちは、生かされ、支えられ、許されて生きています。感謝と慚愧の気持ちが、私たちを自他ともに心豊かに生きることのできる家庭や社会の実現に向かわせてくれるのではないのでしょうか。

私達の社会は、長い歴史と多くの命の営みに支えられてきました。子や孫の時代に良き世の中に成るようにと願いを届けられてきました。今の私達が、自他ともに支えあって生きていくことのできる社会を大切にするためにも、私たちが、阿弥陀様のご本願をよりどころとし、親鸞聖人のみ教えを鏡として日々を送り宗門の実践運動を推進することが大切だと思います。

### ◆味わっていただきたい言葉

わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念仏ころにいらして申して、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ。

（『親鸞聖人御消息』 註釈版聖典 784頁）

自らの往生は間違いないと思う人は、仏のご恩を心に思い、それに報いるために心を込めて念仏し、世の中が安穩であるように、仏法が広まるようにと思われるのがよいと思います。

（『親鸞聖人御消息』 現代語版 82頁）

浄土真宗では本来、「人間」とは煩悩にまみれた存在であると考えます。その煩悩にまみれた人間が他力の信心をいただいて念仏者になり、眞の仏弟子になって往生念仏するのです。「人間性」という言葉に肯定的な意味ばかりがあるわけではありません。

（『愚の力』「人間中心の思想」はおかしい 大谷光真前ご門主）

孤独は山になく街にある。一人の人間にあるのではなく、大勢の人間の「間」にあるのである。孤独は「間」にあるものとして空間の如きものである。「真空の恐怖」それは物質のものでなくて人間のものである。

（『人生論ノート』 三木 清）



ほうゆう さんしゆ ようそ ひとつ あやま あり ふたつ す  
 朋友に三種の要素あり、一には過ちあるをみれば、すなはち相さすとす。二には、好きこと  
 あるをみれば、深く随喜を生ず、三には苦危にあるとも相すてず。

(『仏所行讚』大正蔵四巻・大田利生「譬喩に学ぶ」)

しゆもん しんらんしやうにん おし あお ねんぶつ もうひとひと つど どうぼうきやうだん ひとひと あみ  
 この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥  
 だにやらい ちえ じひ つた きやうだん した てころゆた い  
 陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きることの  
 しゃかい じつげん こうげん  
 できる社会の実現に貢献する。

(浄土真宗の教章)